

リチャード1世の国家防衛

The national Defense of Richard

川 瀬 進

分野：経済史

キーワード：封建制、パロニアル=レヴォルト、サラディン=タイス、カルケージ

I はじめに

ヘンリー2世(Henry , Curtmantle, 1133.3.5-1198.7.6：在位1154-1189)とアリエノール=ダキテーヌ(Alienor d Aquitaine:Eleanor of Aquitaine, 1122-1204)との間の第4子、3男ポワトゥー伯(county of Poitou) およびアキテーヌ公リシャール(Richard, duchy of Aquitaine, 1157.9.8-1199.4.6)が、1189年9月3日にイングランド王位を継承し、リチャード1世(Richard , the Lion Hearted, Cœur de Lion：在位1189.9.3-1199.4.6)となり、アンジュー帝国(Anjou Empire)を、相続した。

3男ポワトゥー伯、およびアキテーヌ公リシャールにとって、このイングランド王位継承は、非常に複雑であった。

というのは、普通で、順調に行けば、父ヘンリー2世の遺言通り、アキテーヌ公爵で終わっていたのである。

それが、イングランド王位にまで就いたということは、外的、内的な要因が、複雑に絡まっていたからである。

その外的要因とは、イングランド王自身が、大陸では、フランス王の家臣であったということである。

内的要因とは、3男リシャールにとって、兄2男アンリ(Henry, 1154.2.28-1183.6.11：後のイングランド王ヤング=ヘンリー Le Jeune：the Young King：在位1170.6.14-1183.6.11)が、1183年6月11日、赤痢(dysentery)で、亡くなっ

たこと¹⁾や、父ヘンリー2世に対し、不満を持っていたことである。

このような状況下のなか、誕生したのが、イングランド王リチャード1世である。

イングランド王に就いたリチャード1世は、まず初めに、イングランド国民の安全、安心を確保しなければならなかった。

そのためには、当然、大陸、フランス王国内に接する、自身の領土の維持、防衛、拡大であった。

このことは、大変なことで、莫大な防衛費、戦費を伴うものであった。

でも、このことが実現できなければ、アンジュー帝国の維持、況してや、イングランド王国の存続も、考えられないことであった。

一般に、リチャード1世は、イングランドで生まれ、戴冠式をイングランドで挙行し、イングランド王に就いたにもかかわらず、イングランドに、あまり愛着を、持っていなかったように言われている。

というのは、リチャード1世は、イングランド王として、トータルで、わずかイングランドに6カ月間しか滞在していなかった²⁾からである。

だが、本当に、リチャード1世は、イングランドに愛着を持っていなかったのであろうか。

リチャード1世は、生まれてから、ほとんどの人生を、母方のフランス、アキテーヌ(Aquitaine)で、過ごした。

なぜ、リチャード1世は、トータルで、わずか6カ月しか、イングランドに滞在しなかったのか、滞在できなかったのか、疑問が残る。

1) Austin Lane Poole, *From Domesday Book to Magna Carta 1087-1216*, in George Clark, ed., *The Oxford History of England*, Vol. 3, Second Edition, reprinted of 1955, ed., Oxford University Press, 1986, p. 341.

2) この6カ月しか滞在していなかったというのは、3男リチャードがオックスフォードで生まれ、すぐにフランス、アキテーヌで、主として過ごし、1189年8月13日、イングランドに戻り、1189年9月3日イングランド王リチャード1世になり、4カ月間の滞在後、1189年12月12日、アキテーヌに行き、1194年3月13日、イングランドに戻り、2カ月間の滞在後、フランスに行った、ということである。・Austin Lane Poole, *The Oxford History of England*, Vol. 3, *ibid.*, pp.349-350

2011年6月 川瀬 進：リチャード1世の国家防衛

この6カ月に対して、リチャード1世は、イングランド王として、イングランドに対して、どのような国益を齎したのであるか。

言い換えると、リチャード1世は、あまり愛着を持っていなかったように思われるイングランドに対して、どのような経済政策を行い、国益を齎したのであるか、が問題となる。

そこで本稿では、リチャード1世が、イングランド王位継承した複雑な経緯、崩壊危機に直面していたアンジュー帝国を、どのように立て直し、防衛したのか、また、6カ月間しか滞在しなかったイングランドに対して、イングランド王として、王国の経済発展、国益に、どのような貢献をしたのか、を考察する。

Ⅱ 幼少期の世情不安

リチャード1世が相続したアンジュー帝国とは、イングランド、およびフランス王国内のノルマンディー、メーヌ、アンジュー、アキテーヌを領有する地域であった。

また、フランス王国内のオーヴェルニュ、トゥールーズの宗主権をも、リチャード1世は有した。

リチャード1世が、イングランドの王位を継承した経緯は、かなり複雑であった。

というのは、この複雑という、父ヘンリー2世と教会との関係、父ヘンリー2世とフランス王ルイ7世(Louis , 1137-1180)との関係、父ヘンリー2世と妻アリエノール＝ダキテーヌとの関係、父ヘンリー2世と子供たちとの拗れた関係のなか、イングランド王としてのリチャード1世が、誕生したからである。

リチャード1世が誕生した経緯を見てみる。

1157年9月8日、イングランド、オックスフォード、ボウモント＝パレス(Beaumont palace)で、誕生した3男リシャールは、すぐに、2男アンリ(後のヤング＝ヘンリー)、長女マティルダ(Matilda of England, 1156-1189.6.28)と

同様に³⁾、フランス、ノルマンディーの居城、ドンフロン城 (Le Château de Domfront) で、育った⁴⁾。

このドンフロン城の中で、3男リシャールは、王室のマナー (manner: 礼儀作法)、教養、男子であるが故の帝王学、騎士道を、学んでいた。

3男リシャールが生まれた当時は、フランス、ノルマンディー公国では、安泰であり、またアンジュー帝国内の国境近くでは、多少の小競り合いがあったものの、アンジュー帝国を、揺るがすような、事件はなかった。

だが、イングランド国内では、違っていた。

父ヘンリー2世が、1164年1月、教会権の裁判権を縮小し、王権を回復させようとした16カ条のクラレンドン法 (Constitutions of Clarendon) に対し、カンタベリー大司教トマス=ベケット (Thomas Becket, c. 1118-1170.12.29, 在位1162-1170.12.29) が反対し、イングランド国内の世情が、混沌としていた。

この反対により、身の危険を感じたカンタベリー大司教トマス=ベケットは、フランスに逃亡した。

イングランド国内で、世情が混沌としていた間、ヘンリー2世ファミリーの中にも、激変が生じた。

それは、ヘンリー2世の浮気であった。

浮気相手は、ロザモンド=クリフォード (Rosamond Clifford, c. 1140-c. 1176) である⁵⁾。

3) 実際ならば、長男ウィリアム (William, 1153.8.17-c. 1155.2) も、2男アンリ、長女マティルダ、3男リシャールと同様に、ドンフロン城で、過ごしたであろうが、長男ウィリアムが、生まれて2年経たないうちに、亡くなっていたので、3男リシャールが生まれた時は、2男ヤング=ヘンリー、および長女マティルダだけであった。3男リシャール以下の兄弟姉妹は、以下の通りである。すなわち、4男ジェフリー (Geoffrey, 1158.9.23-1186.8.19)、2女エレノア (Eleanor of England, 1162.10.13-1214.10.31)、3女ジョアン (Joan of England, 1165.10-1199.9.4)、5男ジャン (John, 1167.12.24-1216.10.18) である。

4) その後、3男リシャールの妹、および弟もドンフロン城 (Le Château de Domfront) で、家族全員、1168年まで育った。この家族全員というのは、1168年に、父ヘンリー2世の愛人問題で、夫婦仲に亀裂が入り、妻アリエノール=ダキテーヌが3男リシャール連れ、故郷のアンジュー伯領の中心地ポワティエ (Poitiers) に帰ったからである。

・Austin Lane Poole, *The Oxford History of England*, Vol. 3, *op. cit.*, p. 333.

5) Austin Lane Poole, *The Oxford History of England*, Vol. 3., *ibid.*, p. 332, n. 5.

2011年6月 川瀬 進：リチャード1世の国家防衛

夫ヘンリー2世の浮気により、激怒した妻アリエノール＝ダキテーヌは、3男リチャールを連れ、1168年、実家のアンジュー、ポワティエ（Poitiers）に戻った。

このことにより、11歳の3男リチャールは、ドンフロン城で、アンジュー帝国の帝王学、および騎士道を学んでいたのを、一層危機感を持ち、学ばなければならなくなった。

この帝王学というのは、アンジュー帝国を維持するための国防と財政である。

イングランドの世情不安に、危機感を抱いたローマ教皇アレクサンデル3世（Alexander , 1159-1181）は、キリスト教国安泰のため、またカンタベリー大司教トマス＝ベケットの身の安全のため、ヘンリー2世とトマス＝ベケットとの和解に乗り出した。

具体的に、ローマ教皇アレクサンデル3世は、自身の特使を、1169年の初め頃に、ノルマンディーでの居城、ドンフロン城にいたヘンリー2世に、使い遣った⁶⁾。

そして、両者の和解のため、1169年1月16日、フランス、モンミラーユ（Montmirail）で、会談が、設けられた⁷⁾。

このモンミライユ 会談で、まず初めに、ヘンリー2世は、フランス王ルイ7世（Louis , 1137-1180.9.28）に対し、封建制度に則り、オマージュ（homage：臣従礼）を執り、フランスの古い慣習に則り、生前贈与として、次のことを行いたい意思のあることを告げた⁸⁾。

この時、2男アンリと3男リチャールも、父ヘンリー2世と同様に、封建制

6) George Burton Adams, *The History of England: from the Norman Conquest to the Death of John (1066-1216)*, in William Hunt and Reginald L. Poole, edited, *The Political History of England*, Vol. 2, reprinted of 1905, edition. AMS Press, Kraus Reprint Co., 1969, p.293.

7) Austin Lane Poole, *The Oxford History of England*, Vol. 3, *op. cit.*, p. 212.

8) • Kenneth O. Morgan, edited by, *The Oxford History of Britain*, John Gillingham, “The Early Middle Ages(1066-1290)”, Reprinted of 1984, ed., Oxford University Press, 1993, p. 145.

• Austin Lane Poole, *The Oxford History of England*, Vol. 3, *ibid.*, p. 329.

度に則り、フランス王ルイ7世に、臣従礼を執った。

このことは、何を意味するかというと、子供たちのフランスでの宗主は、ルイ7世であることを、意味する。

言い換えると、2男アンリと3男リシャールは、ルイ7世の家臣である、ということを経法的に公言したことになる。

なお、長男ウィリアム(William, 1153.8.17-c. 1155.2)は、生前贈与する前に、すでに亡くなっていた。

また、イングランドの相続、言い換えるとイングランドの王冠に関しては、法的に、男子年長者が、受け継ぐことになっていた。

ヘンリー2世が行った大陸での遺産相続は、以下のとおりである。

1. 2男アンリ：ノルマンディー、メーヌ、アンジューの相続。
2. 3男リシャール：ルイ7世の2番目の妃コンスタント＝ドゥ＝カスティーク(Constance de Castille, c. 1136-1160.10.4)の2女アデル＝ドゥ＝フランス(Adele de France, 1160-c.1220：アリス Alys)との婚約、およびアキテーヌの相続。
3. 4男ジェフリー(Geoffrey, 1158.9.23-1186.8.19)：婿養子によるブルターニュ(Brittany)の相続。
4. 5男ジャン(John, 1167.12.24-1216.10.18：後のイングランド王ジョン：在位1199.4.27-1216.12.18)：予期せぬ時にできた子であり、生まれる前に、すでにアンジュー帝国内での遺産相続が決まっていた。そのため、相続地なし⁹⁾。

その後、モンミラーユ会談の主内容であったヘンリー2世と、カンタベリー大司教トマス＝ベケットとの和解は、不調に終わった。

和解のための会談が再度、1169年秋に、パリ郊外モンマルト(Montmartre)で開催された。

モンマルトの会談では、すべてのことがスムーズに運び、重要な事柄が、和

9) Allen Andrews, *Kings and Queens of England & Scotland*, Reprinted of 1976, ed., Marshall Cavendish, 1994, p. 47.

解のため譲歩されたものの、ほんの些細な点で、失敗したため、不調に終わった。

この不調は、当時の慣習として、両者の和解が成立した時、両者は、キスをするのであるが、カンタベリー大司教トマス＝ベケットのキスを、ヘンリー2世が拒否した、ことから分かる¹⁰⁾。

不調の間、イングランドの世情を良くするために、ヘンリー2世は、1170年6月14日、アンジュー伯、ノルマンディー公である2男アンリを、ヨーク大司教ロジャー（Roger, Archbishop of York）の下、ウェストミンスター＝アベイ（Westminster Abbey）において、戴冠式を挙げさせ、イングランド王ヤング＝ヘンリー（Henry, Le Jeune : the Young King, 1154.2.28-1183.6.11）にならせた。

このことがイングランド国内を、ヨリ混沌とさせた。

再々度、両者の和解のため、1170年7月22日、フランス、モンミラーユから、直線で南東約160キロメートルのフレトヴァル（Freteval）で、会談が設けられた¹¹⁾。

このフレトヴァルの会談で、ヘンリー2世が、多少の譲歩を強いらされることにより、一応の和解、協定がなされた。

ヘンリー2世にとって、このフレトヴァル和解、協定は、不満が残るものであった。

この和解、協定により、カンタベリー大司教トマス＝ベケットは、イングランドに戻るようになった。

なお、ローマ教皇アレクサンデル3世は、教会の裁判権を死守しようとしているカンタベリー大司教トマス＝ベケットの態度を、元気づけ、支持した¹²⁾。

王としての権威を、傷つけられたヘンリー2世は、1170年7月22日以降、精神的に心を乱し、平常心ではいられなく、体調不良に陥った¹³⁾。

10) Austin Lane Poole, *The Oxford History of England*, Vol. 3, *ibid.*, p. 212.

11) David C. Douglas and George W. Greenaway, *English Historical Documents*, Vol. 2, Second Edition, reprinted of 1953, ed., Routledge, 1981, p. 805.

12) Cyril E. Robinson, *England: A History of British Progress from the Early Ages to the Present Day*, Thomas Y. Crowell Company, 1928, pp. 72-73.

体調不良に陥ったヘンリー2世は、感情が躁鬱的に陥る重病となり、早急に、国王としての最大の務めである後継者を、法的に明文化しなければならなくなっていた。

すなわち、ヘンリー2世は、ノルマンディーでの居城であったドンフロン城(Le Château de Domfront)にて、イングランド、およびアンジュー帝国安泰のため、子供たちへの相続を遺言として、法的に書き残した。

子供たちへの相続とは、当然、1169年1月16日のモンミラーユ会談、そして1170年7月22日のフレトヴァル協定での意思表示を、法的に実行に移すことであった。

この時、はっきりと、法的に、3男リシャールが、母アリエノール＝ダキテーヌの故郷、封地であるポワトゥー(Poitou)、アキテーヌを相続することとなった。

また、精神的に病み、体調不良に陥り、重病になっていたヘンリー2世は、自身の埋葬地をグランモン修道院(The Order of Grandmont)に、希望した¹⁴⁾。

その後、日が経つにつれ、ヘンリー2世は、精神的に安定し、病気が快復した。

快復のお礼として、神に感謝するために、ヘンリー2世は、1170年8月、ロカマドゥール(Rocamadour)へ、巡礼に出かけた¹⁵⁾。

この頃、ヘンリー2世は、肉体的にも、精神的にも、多少の落ち着きを見せた。

13) Cf. Cyril E. Robinson, *England, ibid.*, p. 73.

・精神的に心を乱したヘンリー2世は、躁鬱病に陥ったように思われる。当時では、躁鬱病という名の病名はなかったが、ヘンリー2世の行動パターンから、すなわち感情が一気に高まり、その後すぐに落ち込んだからである。具体的には、自身の主張を一切変えず、推し進め、それが叶わず妥協させられた時は、落ち込み、体調不良に陥り、その回復のために、神頼みするということである。そのヘンリー2世の躁鬱病の原因は、当然、自身の行動に対して、ローマ教皇アレクサンデル3世から、支持を得ていないことである。

14) ヘンリー2世の埋葬地は、彼が希望したグランモン修道院(The Order of Grandmont)ではなく、実際には、フォンテヴロール＝アベイ(The Abbey of Fontevraud)で、埋葬された。

だが、この落ち着きは、1170年11月末頃まで、であった。

1170年12月1日、イングランド、ケント東部、サンドイッチ(Sandwich)に上陸したカンタベリー大司教トマス＝ベケットは、すぐにカンタベリー大聖堂に、戻った。

約6年後に、カンタベリー大聖堂に戻ったトマス＝ベケットは、王室関係者、およびヘンリー2世と利害関係のある人によって、疎んじられた。

だが、巨大な権力に対して、自身の意思を曲げないトマス＝ベケットは、教会関係者、および民衆たちによって支持された。

民衆の支持を得て、トマス＝ベケットは、ヨーク大聖堂で、イングランド王として、2男アンリの戴冠式を執り行った関係者を、破門した。

王の戴冠式は、伝統的に、ヨークよりも上位にあるカンタベリー大司教が取り行うことが、慣習になっていた。

この伝統を無視した関係者を、処分、破門したのは、カンタベリー大司教トマス＝ベケットであった。

トマス＝ベケットがこのような強権に出たのは、当然、ローマ教皇アレクサンデル3世の支持があったからに他ならない。

ますます民衆からの支持を得ているカンタベリー大司教トマス＝ベケットは、以前と同様、イングランドの教会の中で、NO.1の実力者になった。

このことに対して、ヘンリー2世は、再度、1170年12月25日、憤激した。

その憤激の理由は、2男アンリの戴冠式を執り行った3人の高位聖職者、すなわちヨーク大司教ロジャー(Roger, archbishop of York)、ロンドン司教ギル

15) カンタベリー大司教トマス＝ベケットに対する不満から、またローマ教皇アレクサンデル3世のプレッシャーに対し、精神的な心の病を患ったヘンリー2世は、日が経つにつれ、徐々に快復へ向かった。この快復は、神の御加護によるものと思われ、ヘンリー2世は、神への感謝を表す意思表示として、北西スペイン、聖者ヤコブ(Jacobus)の聖地サンチアゴ＝デ＝コンポステーラ(Santiago de Compostela)へ行く主要な巡礼地、ロカマドゥール(Rocamadour)への巡礼を行った。感情の起伏が激しいヘンリー2世にとって、ロカマドゥールへの巡礼に行くことによって、1170年中頃、多少、精神的に安定した時期を迎えていたことであろう。でも、この精神的安定は、あまり長く続かなかったように思われる。

バート（Gilbert, bishop of London）、ソールズベリー司教ジョセリン（Jocelyn, bishop of Salisbury）を破門したこと、であった¹⁶⁾。

ロカマドゥールへの巡礼にて、多少心の病が癒えていたヘンリー2世にとって、この3人の破門は、衝撃的なものであった。

ヘンリー2世の憤激の叫びを聞いた、側近の4人の騎士が煽られ、1170年12月26日、トマス=ベケット殺害のためノルマンディーから、カンタベリーに向かった¹⁷⁾。

結果的に、4人の騎士によって、トマス=ベケットは、1170年12月29日、カンタベリー大聖堂の北東の袖廊（シュウロウ）で、殺害された¹⁸⁾。

このトマス=ベケットの殺害は、ヘンリー2世にとって、マイナス要因であった¹⁹⁾。

ヘンリー2世は、トマス=ベケットの殺害に対し、悔い、懺悔したため、ローマ教皇アレクサンデル3世から破門されるのを許された。

このことにより、ヘンリー2世が目指していた行政改革の1部が挫折した。

というのは、1164年1月、教会権の裁判権を縮小しようとした16カ条のクランドン法が、廃止になり、王権が強化されなく、聖職の特典が復活した、からである。

Ⅲ バロニアル=レヴォルト（the Baronial Revolt：バロンの反乱）

トマス=ベケットの殺害は、当然、幼少時に家庭教師をして頂いていた経緯上、2男ヤング=ヘンリーの耳に入り、彼を激怒させた。

さらに、この殺害は、13歳の3男リシャルルの耳にも入り、彼の父ヘンリー

16) David C. Douglas and George W. Greenaway, *English Historical Documents*, Vol. 2, *op. cit.*, p. 809.

17) David C. Douglas and George W. Greenaway, *English Historical Documents*, Vol. 2, *ibid.*, p. 809.

18) Christopher Harper-Bill, *Saint Thomas Becket*, reprinted of 1990, ed., Cathedral Enterprises Ltd., 2001, p. 33.

19) Cf. J. R. Moreton-Macdonald, *A History of France*, Vol. 1, reprinted of 1915, ed., AMS Press, Inc., 1971, p. 127.

2011年6月 川瀬 進：リチャード1世の国家防衛

2世に対する敵愾心を、一層燃えさせていった。

13歳の3男リチャールは、イングランドにおけるキリスト教の重要性を、再確認し、アンジュー帝国の帝王学において、国防および国内安泰のため、宗教の重要性を、身を持って知らされた。

イングランド国内において、ヘンリー2世が目指していた行政改革において、封建的バロン(Baron:国王から直接に封土を受け取っている貴族)は、非常に不満であった。

というのは、バロンたちが得ていた既得権を、行政改革のもと、剥奪していったからである。

具体的には、エヤー(the Eyre:巡回裁判制度)の復活である²⁰⁾。

このエヤー巡回裁判制度は、国王が、各カウンティ(County:州)に、国王裁判官を派遣させることにより、裁判行政を、統括させた法律である。

このことにより、シェリフ(the Sheriff:州長官)の悪政をなくし、バロンによる恣意的な裁判権を防止させた²¹⁾。

また行政改革の一環として、バロンの軍事力を削減させるために、スキューテイジ(Scutage:軍役免除金)あるいはシールド=マネー(Shield-Money:楯税)という納税を、徴収していたからである²²⁾。

バロンたちの不満は、しだいに熾りはじめていった。

1172年、3男リチャールは、ポワティエ(Poitiers)のセント=ヒラリー教会(St. Hilary)で、正式に、アキテーヌ公(duchy of Aquitaine)、ポワトゥー伯(county of Poitou)に即位した²³⁾。

15歳の3男リチャールが、正式に、フランス所領でのアキテーヌ公、ポワトゥー伯に即位したとしても、そこでの実権は、依然として、父ヘンリー2世が握っていた。

20) Austin Lane Poole, *The Oxford History of England*, Vol. 3, *op. cit.*, p. 399.

21) Cf. Austin Lane Poole, *The Oxford History of England*, Vol. 3, *ibid.*, p. 400.

22) Austin Lane Poole, *The Oxford History of England*, Vol. 3, *ibid.*, p. 16.

・Cyril E. Robinson, *England*, *op. cit.*, p. 92.

23) Austin Lane Poole, *The Oxford History of England*, Vol. 3, *ibid.*, p. 329.

・George Burton Adams, *The Political History of England*, Vol. 2, *op. cit.*, p. 303.

それゆえ、父ヘンリー2世に対する3男リシャールの不満、および敵愾心は、一層増幅し始めていった。

父ヘンリー2世に対する、2男ヤング＝ヘンリー、および3男リシャールの敵愾心、さらにバロンたちの不満は、1173年の春まで、反乱へとは繋がらなかった。

これらの敵愾心、不満が爆発し、反乱へとなったのは、2男ヤング＝ヘンリーが、再度、父ヘンリー2世に対して、実質的なイングランドの統治権を譲るよう要求した時、この要求を、父ヘンリー2世が拒否した時であった²⁴⁾。

それゆえ、1173年の春以降、イングランド、およびアキテーヌにおいてバロニアル＝レヴォルト (the Baronial Revolt : バロンの反乱) が勃発した²⁵⁾。

なお、このバロニアル＝レヴォルトには、フランス王ルイ7世も、加勢している。

このバロニアル＝レヴォルトのうち、最大な反乱は、レスター伯ロベルト (Robert, Earl of Leicester) が、1173年10月、傭兵と共に、イングランド東岸ノーフォーク (Norfolk) の侵攻であった²⁶⁾。

だが、レスター伯ロベルトの侵攻は、失敗に終わった²⁷⁾。

また、このようなバロニアル＝レヴォルトの情報を得たスコットランド王ウィリアム1世 (William I, the Lion, 1165-1214) は、昔からの宿敵であったヘンリー2世に対して、1174年3月31日、イングランド北部、ノーサンバランド (Northumberland) に、侵攻した²⁸⁾。

1174年7月8日、ヘンリー2世は、アキテーヌにおけるバロニアル＝レヴォルトを、煽った罪として、妻アリエノール＝ダキテーヌと、息子の妻や婚約者

24) George Burton Adams, *The Political History of England*, Vol. 2, *ibid.*, p. 305.

25) George Burton Adams, *The Political History of England*, Vol. 2, *ibid.*, p. 305.

26) Austin Lane Poole, *The Oxford History of England*, Vol. 3, *op. cit.*, p. 335.

・George Burton Adams, *The Political History of England*, Vol. 2, *op. ibid.*, p. 309.

27) George Burton Adams, *The Political History of England*, Vol. 2, *ibid.*, p. 309.

28) Charles Oman, *A History of The Art of War in the Middle Ages*, Vol. 1.: 378-1278 AD, Reprinted of 1924, ed., Greenhill Books, 1991, p. 400.

・Austin Lane Poole, *The Oxford History of England*, Vol. 3, *op. cit.*, p. 335.

2011年6月 川瀬 進：リチャード1世の国家防衛

たちを捕らえ、イングランドで監禁するため、翌日の1174年7月9日に、カンタベリーへと、連行した²⁹⁾。

ヘンリー2世が、カンタベリーへ行ったのは、当然、前カンタベリー大司教トマス＝ベケットの墓にて、贖罪を行うためであった³⁰⁾。

なお、1174年7月9日に、イングランドへと連行された妻アリエノール＝ダキテーヌだけは、以後10数年間、反逆の罪で、監禁生活を強いられました。

スコットランド王の侵攻は、最初は作戦通り、順調に行ったが、1174年7月13日、ノーサンバランドのアニク(Alnwick)で、濃霧に隠れていたヘンリー2世軍に、スコットランド王自らが捕らえられ、失敗に終わった³¹⁾。

イングランドにおいては、ヘンリー2世軍が勝利を収め、バロニアル＝レヴォルトを、鎮圧した。

フランスのアンジューにおいては、依然として、息子たちが活躍し、戦闘状態であった。

1174年初旬から、2男ヤング＝ヘンリーが、フランドル伯爵(the Count of Flanders)と、ブローニュ伯爵(the Count of Boulogne)と共に、ノルマンディーの東部から、ルイ7世が南部から、ブラバント傭兵隊(Brabantine mercenaries)が西部から侵攻していた³²⁾。

そして、ヘンリー2世が、ルーアン(Rouen)を不在にしている時、2男ヤング＝ヘンリーと、フランドル伯爵とが、ルーアンを包囲攻撃した³³⁾。

29) George Burton Adams, *The Political History of England*, Vol. 2, *op. cit.*, p. 309.

30) David Hume, *The History of England; from the Invasion of Julius Caesar to The Revolution in 1688*, Vol. 1, Reprinted of 1778, ed., LibertyClassics, 1983, p. 355.

31) George Burton Adams, *The Political History of England*, Vol. 2, *op. cit.*, pp. 311-312.

Andrew Lang, *A History of Scotland: from the Roman Occupation*, Vol. 1, Reprinted of 1903, ed., AMS PRESS, 1970, p. 112.

Charles Oman, *A History of The Art of War in the Middle Ages*, Vol. 1, *op. cit.*, p. 400.

* オーマン氏の研究によると、濃霧があった月を6月としているが、上記2つの史料(アダムス氏とラング氏の研究)から、7月とした。

32) George Burton Adams, *The Political History of England*, Vol. 2, *ibid.*, p. 308.

33) George Burton Adams, *The Political History of England*, Vol. 2, *ibid.*, p. 312.

だが、1174年8月6日、ヘンリー2世が、精力的に活気あふれる大軍隊を引き連れ、ルーアンに戻って来た時、一変した。

この大軍隊は、ブラバント軍 (Brabantine soldiers)、ウェイルズ軍 (force of Welshmen)、スコットランド王を含む捕虜たちで、構成されていた³⁴⁾。

このような状況の中、勝ち目がないと判断したルイ7世は、早急に、ルーアンの包囲を解き、撤退した。

そこで、1174年9月8日、和平会談を開催させるために、フランス王ルイ7世から、ヘンリー2世に、メッセンジャー (messenger: 使者) が、送られた。だが、3男リシャールがアキテーヌにて、戦争状態であったので、和平会談は、開催されなかった³⁵⁾。

ヘンリー2世の息子たちの中で、最後まで、父ヘンリー2世に対し、反乱を続けていた3男リシャールは、このような状況を判断して、1174年9月23日、父ヘンリー2世に帰順した。

このように戻すぼみになっていったバロニアル=レヴォルトは、1174年9月30日、和平会談で、幕を閉じた³⁶⁾。

IV 有能なナイト

1174年の和平会談で、ファレーズ条約 (the treaty Falaise) が、1174年10月に、結ばれた。

この1174年10月のファレーズ条約により、3男リシャールは、再び、父ヘンリー2世の支配下のもと、ポワトゥー伯領を所有し、その伯領での税金2分の1を、父ヘンリー2世に支払うことになった³⁷⁾。

また、このファレーズ条約は、反乱に加わったスコットランドに対しても、

34) Cf. George Burton Adams, *The Political History of England*, Vol. 2, *ibid.*, pp. 312-313.

35) George Burton Adams, *The Political History of England*, Vol. 2, *ibid.*, p. 313.

36) George Burton Adams, *The Political History of England*, Vol. 2, *ibid.*, p. 313.

37) Cf. George Burton Adams, *The Political History of England*, Vol. 2, *ibid.*, pp. 313-314.

規定していた。

すなわち、「スコットランド王ウィリアム（William of Scotland）は、イングランド王の家臣になること³⁸⁾」、言い換えると、スコットランド王ウィリアム1世（William , the Lyon, 1165-1214）は、イングランド王ヘンリー2世に対し「臣従礼」執るということである。

この1174年10月のファレス条約以降、イングランドでは、平和が訪れた。

3男リシャールは、1168年に、母アリエノール＝ダキテーヌの実家のアンジュー、ポワティエ（Poitiers）に連れて来られて以来、帝王学、および騎士道として、戦術、武人の身だしなしを学んだ。

その戦術は、実践として、すなわち、ポワトゥー伯領を死守したり、アキテーヌ公領を防衛したり、また父ヘンリー2世への反乱として培われて行った。

バロニアル＝レヴォルトの失敗、つまり父ヘンリー2世に対する反乱の失敗後、3男リシャールに心境の変化が現れた。

つまり、3男リシャールが、1174年9月23日、父ヘンリー2世に帰順した後、3男リシャール自身の態度に変化が現れた。

特に顕著に表れたのは、1174年2月、父ヘンリー2世に、オマージュ（homage：臣従礼）を執った後であった。

すなわち、17歳になっていた3男リシャールは、アキテーヌにおいて、父ヘンリー2世に対し、反乱を企てているバロンたち、言い換えるとアキテーヌの平和を、掻き乱しているバロンたちに対し、独特な激しい破壊行為でもって、また反乱を引き起こすような城砦を、上手な取り壊しでもって、絶え間ない戦争を続けた³⁹⁾。

3男リシャールの敵に対する破壊行為は、バロンに対しても、城砦に対しても行われた。この破壊行為のやり方は、父ヘンリー2世のやり方に似ている。

喜怒哀楽が激しく、躁鬱的なヘンリー2世は、感情が高まると、普通では考えられない想像を絶するような行動をとった。

38) Austin Lane Poole, *The Oxford History of England*, Vol. 3, *op. cit.*, p. 277.

39) *Cf.* Austin Lane Poole, *The Oxford History of England*, Vol. 3, *ibid.*, p. 340.

このような父ヘンリー2世の性格、行動が、3男リシャールにも、引き継がれた。

3男リチャードの性格は、父ヘンリー2世同様、生まれ持って感情の喜怒哀楽が激しく、その行動は、一直線に突き進む、直感型、激情型タイプであった。

だが、父ヘンリー2世の性格と違うところは、1つ。

それは、3男リシャールの性格を最も表しているところなのだが、興味がなくなったことに対しては、すぐに手を引き、新しい興味を見つけ、それに没頭するという移り気な性格であった。

その移り気な性格を表していることに、以下の史実がある。

それは、1173年の春以降、勃発したバロニアル＝レヴォルトに加わったバロン、言い換えると、3男リシャールと意を共にし、ヘンリー2世に対し反乱を起こしたバロンたちが、1174年2月以降、今度は、3男リシャールの敵として、攻撃されたことである。

3男リシャールの家臣として仕えていたバロンが、3男リシャールの心境の変化で、攻撃されるとは、考えられないことである。

もし、こんなことが、度々繰り返されることになると、3男リシャールの信用は、失われ、親密な家臣であるバロンであっても、反3男リシャール派になっていくので、領主、および国王たるものは、そう容易く、自身の方針を変えてはいけないのである。

1176年、19歳近くになった3男リシャールは、父ヘンリー2世に対し、多少の蟠りがあったものの、完全に、父ヘンリー2世を助ける有能なナイトに成長していた⁴⁰⁾。

3男リシャールが、有能な騎士として、実績を積んでいる間、フランスでは、ルイ7世の息子フィリップが、1179年11月1日、王となるべき戴冠式を挙げ、フランス王フィリップ2世(Philippe , Auguste: オギュスト尊厳王, 1165.8.21-1223.7.14)となった⁴¹⁾。

40) George Burton Adams, *The Political History of England*, Vol. 2, *op. cit.*, p. 327.

41) Austin Lane Poole, *The Oxford History of England*, Vol. 3, *op. cit.*, p. 340.

その後、ルイ7世が、1180年9月18日に亡くなり⁴²⁾、フィリップ2世が、単独王として、フランス王に就いた。

ルイ7世が亡くなった後も、フィリップ2世は、父ルイ7世と同様、対アンジュー政策を、続けた。

この対アンジュー政策というのは、当然、フィリップ2世が、フランス王国内で、アンジュー帝国が拡大していること、への危機感から取られた政策である。

その危機感に対して、フィリップ2世は、父ルイ7世の政策と同様、ヘンリー2世の息子との政略結婚によって、アンジュー帝国を分割させようとした⁴³⁾。

言い換えると、フィリップ2世は、政略結婚によって、アンジュー帝国を分割させ、アンジュー帝国の権力を、縮小させようとしたのである。

1182年に、アンジュー国内の相続において、ヘンリー2世の息子たちの間で、不和が生じた。

それは、2男ヤング＝ヘンリーが、1170年6月14日に、イングランド王に就いたのだが、実権は、依然として、父ヘンリー2世にあったので、その不満から、アキテーヌを相続しようとして、3男リシャール（アキテーヌ公）と、4男ジェフリー（ブルターニュ公）とに対し、自身に臣従礼を執るよう要求したからである。

実際に、2男ヤング＝ヘンリーは、3男リチャード攻撃するために、アキテーヌの地において、反3男リシャール派のパロンたちを、支援した⁴⁴⁾。

4男ジェフリーは、2男ヤング＝ヘンリーへの臣従礼を執った。

だが、3男リシャールは、アキテーヌに戻り、2男ヤング＝ヘンリーへの臣従礼を拒否し、アキテーヌ譲渡を、きっぱり断り、反抗した⁴⁵⁾。

42) モレトン＝マックドナルド氏の研究によると、ルイ7世の死亡日を、1180年9月28日としているが、プールの研究に従い、1180年9月18日とした。

・J. R. Moreton-Macdonald, *A History of France*, Vol. 1, reprinted of 1915, ed., AMS Press, Inc., 1971, p. 134.

・Austin Lane Poole, *The Oxford History of England*, Vol. 3, *op. cit.*, p. 340.

43) Cf. J. R. Moreton-Macdonald, *A History of France*, Vol. 1, *op. cit.*, p. 134.

44) Cf. George Burton Adams, *The Political History of England*, Vol. 2, *op. cit.*, p. 335.

結果的に、3男リシャールは、2男ヤング=ヘンリーと、4男ジェフリーとに攻撃される羽目になった。

2男ヤング=ヘンリーの行動には、多少、納得できるところがある。

2男ヤング=ヘンリーは、ノルマンディー、メーヌ、アンジューを相続したのであるが、そこでの実権は、依然として、父ヘンリー2世にあったので、弟の3男リシャールの所領を、獲得したいという気持ちになったのは、当然のことであろう。

この兄弟の不和が、家族内の不和へとなったのは、2男ヤング=ヘンリーが、1183年6月11日、赤痢(Dysentery)で亡くなり⁴⁵⁾、3男リシャールが、後継者、すなわち王位継承者の筆頭になったからある。

父ヘンリー2世は、3男リシャールが、後継者になったことにより、未だに、アンジュー帝国内の領土を所有、保有もしていない5男ジャン(John, 1167.12.24-1216.10.18)⁴⁷⁾に、アキテーヌを、相続させたい、という気持ちが働いた⁴⁸⁾。

この時点で、父ヘンリー2世が考えたアンジュー帝国内での相続。

1. 3男リシャール：イングランドの王冠、ノルマンディー、メーヌ、アンジューの相続と、ルイ7世の2番目の妃コンスタント=ドゥ=カスティューユの2女アデル=ドゥ=フランスとの婚約。
2. 4男ジェフリー：婿養子によるブルターニュの相続。
3. 5男ジャン：アキテーヌの相続。

45) George Burton Adams, *The Political History of England*, Vol. 2, *ibid.*, p. 335.

46) Austin Lane Poole, *The Oxford History of England*, Vol. 3, *op. cit.*, p. 341.

47) 5男ジャンは、予期せぬときに生まれた男子であり、彼が生まれる前に、すでに、フランスの慣習法に従い、1169年1月6日、モンミラユ(Montmirail)の会談で、イングランド、アンジュー帝国の相続が決まっていた。領土無しの5男ジャンを、哀れに思った父ヘンリー2世は、1177年5月、ローマ教皇アレクサンデル(Alexander III, 1159-1181)の許しを得て、5男ジャンに、アイルランドを与えた。すなわち、5男ジャンを、ドミヌス=ヒベルニ(Dominus Hibemiae:アイルランド太守)にした。・Allen Andrews, *Kings and Queens of England & Scotland*, *op. cit.*, pp. 46-47.

48) 領土無しの5男ジャンに、多少とも領土を与えたい、というのは、父ヘンリー2世の親心であろう。また、息子たちの内で、父ヘンリー2世に対して、多少の不満があったかもしれないが、反乱を起こさなかったのは、5男ジャンだけであり、また、末っ子の5男ジャンが、父ヘンリー2世にとって、1番可愛かったかもしれない。

言い換えると、父ヘンリー2世の相続上の提案、願望、意図は、イングランドの王冠と、2男ヤング＝ヘンリーが所有していた領地を、3男リチャールが受け継ぎ、その代わりに、3男リチャールが所有していたアキテーヌ公領を、5男ジャンに、譲れということであった。

この父ヘンリー2世の提案、願望、意図を、3男リチャールは、激怒し、きっぱり拒否した⁴⁹⁾。

ここでも、3男リチャールの直感型、激情型な性格がでた。

領主の最大の役目は、自己の所領を現状よりも少なくせず、多少とも増加させることであった。

3男リチャールが所有しているアキテーヌは、母アリエノール＝ダキテーヌの故郷であり、また愛着のある領地である。だが、その地での実権は、父ヘンリー2世が握っている。

このような母に対するしがらみにおいて、3男リチャールは、このアキテーヌを手放してまでも、他の領地を獲得することに、意義を見出せないでいた。

3男リチャールは、アキテーヌを所有したままで、他の領地を獲得することに、意義を見出した。

このことが、経済的にも得策であることは、3男リチャールにとっても、周知の事実であった。

3男リチャールにとって、第1義的な意味は、アキテーヌである。第2義的には、イングランドの王冠、ノルマンディーであったかもしれない。

だが当時、イングランドの王冠が、第2義的であるとは、実際問題考えられないことである。

イングランドの王位継承者王の1番筆頭にある3男リチャールにとって、ウィリアム1世 (William , the Conqueror, 1066-1087) から受け継ぎ、そして父ヘンリー2世が受け継いだ伝統的な尊厳さ、高貴さを兼ね備えているイングランドの王冠を、5男ジャンに譲渡するとは、考えられないことである。

このような考え方は、イングランド国民にも、浸透していることである。

49) George Burton Adams, *The Political History of England*, Vol. 2, *op. cit.*, p. 338.

すなわち、イングランドの1番筆頭王位継承者は、イングランドの王冠を、第1義的に考えなければならないことであった。

そこで、3男リシャールは、決してイングランドを疎んじたりしていなく、むしろイングランドを、最重要所有地と考えていたのである。

アンジュー国内の相続において、新たな問題が生じた。

それは、2男ヤング=ヘンリーが、1183年6月11日、赤痢(Dysentery)で、亡くなった後である。

2男ヤング=ヘンリーの妻、マーガレット(Margaret of France; Marguerite de France, 1158-1197)が、フィリップ2世の異母姉であった。

このことにより、フィリップ2世が、ノルマンディーのヴェクサン地方(the Vexin)と、重要な要塞地ジゾール(Gisore)とを、要求してきた⁵⁰⁾。

このフィリップ2世の要求に対して、1183年12月初めに、ジゾール近くで会談が、設けられた⁵¹⁾。

会談の結果、ヘンリー2世は、フィリップ2世に対し臣従礼を執り、マーガレットに対しては、充分な年金を与え、その代わり、かつて約束していた、ヘンリー2世の息子たちの1人がアデル=ドゥ=フランス(Adele de France, 1160-c.1220: アリス Alys)と結婚し、所有するジゾールは、永久にノルマンディーに属する、という協定が、結ばれた⁵²⁾。

この協定で言うアデルの婚約者は、当然、3男リシャールである。

3男リシャールも、そのことを、承知している。

承知といっても、当時は、政略結婚であり、断ることができなかった。

フランス王フィリップ2世との領有問題、すなわちルマンディーのヴェクサン地方(the Vexin)と、重要な要塞地ジゾール(Gisore)との問題は、一応、解決したものの、1184年に再度、5男ジャンへのアキテーヌ相続で、3男リシャールは、父ヘンリー2世、5男ジャン、5男ジャンの加勢した4男ジェフ

50) George Burton Adams, *The Political History of England*, Vol. 2, *ibid.*, p. 338.

51) George Burton Adams, *The Political History of England*, Vol. 2, *ibid.*, p. 338.

52) George Burton Adams, *The Political History of England*, Vol. 2, *ibid.*, p. 338.

2011年6月 川瀬 進：リチャード1世の国家防衛

リーと、家族内で、気まずい関係になってしまった⁵³⁾。

V サラディン=タイス (the Saladin tithe : サラディンの10分の1税)

ヘンリー2世の家族内で、相続について、もめている間、1185年の初めに、重大な問題が、飛び込んできた。

それは、新ムハンマド帝国 (a new Mohammedan) を創設したサラディン (Saladin : サラーフ=アッディー Salāh al-Dīn al Ayyūb : サラーフウディーン, 1138-1193)⁵⁴⁾ が急速に領土を拡大し、エルサレム王国 (the Kingdom Jerusalem) に脅威を与えている、ということであった⁵⁵⁾。

27歳の3男リチャードは、この時点でのサラディンの脅威に対して、あまり関心がなかった。

3男リチャードにとって、宗教に対する畏怖の念は、持っていたが、現時点では、父ヘンリー2世に対する憎悪の念の方が強かった。

だが、その後、1186年4月頃に、3男リチャードは、父ヘンリー2世と良好な関係になった。

その良好な期間の間に3男リチャードは、常にアキテーヌの国境沿で、小競り合いを起こしている、長年の宿敵であるトゥールーズ伯 (the Count of Toulouse) を攻撃した⁵⁶⁾。

その同じ年の1186年8月19日に、父ヘンリー2世から離れ、年も近いフィリップ2世のところにも身を寄せていた4男ジェフリーが、馬上槍試合で、亡くなってしまった⁵⁷⁾。

フィリップ2世にとっては、一時、兄弟のように仲良しで育った4男ジェフリーの死は、ショックであった。

53) George Burton Adams, *The Political History of England*, Vol. 2, *ibid.*, p. 339.

54) サラディンは、イランのクルド人であり、ファーティマ朝 (Fatimids) に仕え、宰相になった。その後、ファーティマ朝の宰相を、辞さざるを得なくなり、アラビアのアイユーブ朝 (Ayyūb) を創始し、エジプトとシリアの王になった。

55) George Burton Adams, *The Political History of England*, Vol. 2, *ibid.*, p. 340.

56) George Burton Adams, *The Political History of England*, Vol. 2, *ibid.*, p. 345.

57) George Burton Adams, *The Political History of England*, Vol. 2, *ibid.*, p. 346.

というのは、フィリップ2世が、4男ジェフリー、すなわち、すでに1181年に、ブルターニュ公になっていた4男ジェフリーと共に、ヘンリー2世に対し、反乱を起こし、アンジュー帝国の弱体化を考えていたからである。

そこで、フィリップ2世は、野望を貫くために、今度は、3男リシャールに近づき、彼からヘンリー2世に謀反を起こさせることにした⁵⁸⁾。

3男リシャールから攻撃され、形勢が悪くなったトゥールーズ伯レイモン5世 (Raymond V, the Count of Toulouse) は、フィリップ2世に援護を求めた⁵⁹⁾。

そのフィリップ2世は、1187年5月中旬以降に、アキテーヌ公領東部の重要な城砦、シャートルー城 (castle of Châteauroux) を、包囲攻撃した⁶⁰⁾。

この攻撃に対し、3男リシャールは、自身で武器を持ち、また5男ジャンの加勢により、シャートルー城を、守ることができた⁶¹⁾。

3男リシャールが、このシャートルー城を守れた理由は、3男リシャール、および5男ジャンの軍事力が優れていたのではなく、父ヘンリー2世が加勢のため、このシャートルー城に近づいた時、フィリップ2世が、このシャートルー城の包囲攻撃を、止めたからである⁶²⁾。

フィリップ2世が、このシャートルー城の包囲攻撃を、止めた理由は、フィリップ2世自身の野望の最終目的が、このシャートルー城を奪取、延いてはアキテーヌ公領を支配することではなく、飽くまでも、アンジュー帝国の弱体化にあったからである。

ヘンリー2世も、この戦争を続けることに、本意でなかったので、1187年6月、シャートルー和平会談 (Peace of Châteauroux) が開催された⁶³⁾

フィリップ2世は、自身の野望のため、3男リシャールを、父ヘンリー2世から遠ざけた。

3男リシャールにとっても、フィリップ2世の野望と、利害関係が一致し、

58) J. R. Moreton-Macdonald, *A History of France*, Vol. 1, *op. cit.*, p. 135.

59) Austin Lane Poole, *The Oxford History of England*, Vol. 3, *op. cit.*, p. 344.

60) George Burton Adams, *The Political History of England*, Vol. 2, *op. cit.*, p. 347.

61) George Burton Adams, *The Political History of England*, Vol. 2, *ibid.*, p. 347.

62) George Burton Adams, *The Political History of England*, Vol. 2, *ibid.*, p. 347.

63) J. R. Moreton-Macdonald, *A History of France*, Vol. 1, *op. cit.*, p. 135.

2011年6月 川瀬 進：リチャード1世の国家防衛

父ヘンリー2世に対し距離を置き、謀反を起こし始めた。

アンジュー家とカペー家とが、領地について戦っている間、キリスト教国にとって、重大な危機が生じた。

それは、1187年10月3日、サラディンによる、エルサレム王国の占領であった⁶⁴。

これに対して、教皇グレゴリ8世（Gregory , c. 1100-1187.12.17）は、聖地エルサレムの奪還を、キリスト教国圏に呼びかけた⁶⁵。

これに呼応したのが、4人の王である⁶⁶。

- 1 . 神聖ローマ帝国ドイツ皇帝フリードリヒ1世 = バルバロッサ
（Friedrich , Barbarossa : 赤髭, c.1124-1190 : 在位 1152-1190）
- 2 . リチャード1世
- 3 . フィリップ2世
- 4 . オーストリア公レオポルト5世（Leopold , Duck of Austria, ?-1194）

キリスト教国の一般領民の意見として、エルサレムの奪還要求が、強まった。

30歳になった3男リシャールは、領民と同様、サラディンに対する脅威が高まり、キリスト教圏の1指導者として、討伐の意識を持ち始めた。

3男リシャールが、この討伐の意識をさらに高めたのには、2つの理由がある。

第1は、イングランドの王位を継承し、国王になる、ということである。

第2は、父からフランスでの広大な領地を相続し、維持しなければならない、ということである。

さらに、この討伐の意識は、イングランドの王位継承者の筆頭である3男リシャールに、イングランドの国防意識を、植え付けた。

というのは、3男リシャールが、イングランドの国王になったならば、国王の責務である領民の生活を安定、安心させなければならなかったからである。

また、フランスの広大な領地に対する維持の意識は、イングランドよりも、

64) J. R. Moreton-Macdonald, *A History of France*, Vol. 1, *ibid.*, p. 136.

65) George Burton Adams, *The Political History of England*, Vol. 2, *op. cit.*, p. 349.

66) Cyril E. Robinson, *England, op. cit.*, p. 83.

強くなかったように思われる。

というのは、フランスの封建制度で、イングランド王は、フランス王の家臣であり、その所有地の領主、宗主は、フランス王であった、からである。

キリスト教国圏を守るため、すなわち十字軍参戦によるエルサレム奪還のため、1188年1月21日、ジゾールにて、ヘンリー2世とフィリップ2世との和平会談が、開催された⁶⁷⁾。

そのジゾール和平会談にて、2人の王は、和平のためのキスを交わした⁶⁸⁾。

ヘンリー2世が、十字軍に参戦することになった理由は、2つある。

第1は、1187年に、ボードゥアン4世 (Baudouin , 1161-1185.3.16 : 在位 1174-1185) のエルサレムが、イスラム教徒のサラディンによって陥落させられたこと。

ヘンリー2世とボードゥアン4世とは、両方の祖母は異なるが、祖父が、アンジュー伯、エルサレム王フルク5世 (Foulque , c. 1089-1143.11.13 : アンジュー伯、在位 1109-1129 : エルサレム王、在位 1131-1143) であり、いとこ同士にあたる。

第2は、1172年に、カンタベリー大司教トマス = ベケット殺害に対する懺悔として、十字軍への参戦と、テンプル騎士団への寄進とを、ローマ教皇アレクサンデル3世に、約束していたこと⁶⁹⁾。

だが、ヘンリー2世は、十字軍参戦に対し、人員とお金は出したが、本人自身は、戦地に向かっていない。

この会談の2、3日後、エルサレム奪還のため、ヘンリー2世は、生まれ故郷のル = マン (Le Mans) で、会議を開き、十字軍参戦のための課税、いわゆるサラディン = タイス (the Saladin tithe : サラディンの10分の1税) を、すべてのバロンに命じた⁷⁰⁾。

67) George Burton Adams, *The Political History of England*, Vol. 2, *op. cit.*, p. 350.

68) Georges Duby, *France in the Middle Ages 987-1460*; from Hugh Capet to Joan of Arc, Reprinted of 1987, ed., Blackwell Publishers, 1991, p. 211.

69) George Burton Adams, *The Political History of England*, Vol. 2, *op. cit.*, p. 300.

70) George Burton Adams, *The Political History of England*, Vol. 2, *ibid.*, p. 351.
Austin Lane Poole, *The Oxford History of England*, Vol. 3, *op. cit.*, p. 419.

このサラディン＝タイスは、イングランドにおいて、単に土地だけではなく、動産、不動産のすべての財産に課せられた最初の直接税である。

また、このサラディン＝タイスは、イングランドのバロンたちにとって、精神的にはきつかったかもしれないが、肉体的には歓迎された。

というのは、スキューテイジ（Scutage：軍役免除金）、あるいはシールド＝マネー（Shield-Money：楯税）と同様、このサラディン＝タイスを支払えば、十字軍遠征に、出兵しなくても済んだからである。

当然、このサラディン＝タイスは、外国人傭兵を雇う経費に向けられた。

また、このサラディン＝タイスは、イングランドのフランス領においても、課せられた。

イングランドにおけるサラディン＝タイスにより、イングランドの課税収入増が、13,000 パンド見込まれ、その内、6,000 パンドは、ユダヤ人から、強制的に奪い取った収入であった⁷¹⁾。

その後、トゥールーズ伯レイモン5世は、長年の敵愾心から、イングランド出身の商人、数名を拘束した。

これに対して、3男リシャールは、トゥールーズに乗り込み、トゥールーズ伯領の主要大臣を拘束し、そして彼の解放を拒否した。

さらに、これに対して、トゥールーズ伯レイモン5世は、サンチアゴ＝デ＝コンポステーラ（Santiago de Compostela）への巡礼の帰り、トゥールーズに立ち寄ったイングランドのナイト（knight：騎士）、2人を拘束した⁷²⁾。

トゥールーズ伯レイモン5世は、3男リシャールに対し、トゥールーズ伯領の主要大臣の解放、交換を申し出たが、3男リシャールは、拒否した。

このような経緯を、3男リシャールは、フィリップ2世に訴えたが、解決できなかった。

そこで、トゥールーズ伯レイモン5世の一連の行為に対して激怒した、3男

71) J. H. Round, "The Saladin Tithe" *The English Historical Review*, Vol. 31, (1916), p.447.

72) George Burton Adams, *The Political History of England*, Vol. 2, *op. cit.*, p. 352.

リシャールは、自らトゥールーズに乗り込み、伯領内の城を、次から次へと攻撃、占領していった。

これに対し、今度は、トゥールーズ伯レイモン5世が、フィリップ2世の支援を求めた。

このような状況を良く見ていたフィリップ2世は、トゥールーズ伯レイモン5世側に立ち、オーヴェルニュ (Auvergne) に侵攻し、シャトールー城を奪取し、ほとんどすべてのベリー (Berry) 地域を、占領した⁷³⁾。

1188年7月11日、この戦争に介入するために、ヘンリー2世が、ノルマンディーにやって来た。

この介入は、あまり功を奏さなかった。

そこで、このような戦争を回避するために、1188年8月16日、ジゾール近くの王の伝統的会談場所、巨大な榆の古木 (the old elm tree) がある場所で、3日間の休戦会談が開催された⁷⁴⁾。

だが、この会談では、成果がなかった。

そうこうするうちに、突然、1188年8月30日、マント (Mantes) で、激戦が繰り広げられた⁷⁵⁾。

この激戦中、3男リシャールにとって、気が休まらなかったのは、父ヘンリー2世に対する不信感と敵愾心であった。

この3男リシャールの気持ち、フィリップ2世に、歩み寄る結果となった。

フィリップ2世側にしても、アンジュー帝国の弱体化のため、3男リシャールを受け入れる用意があった。

そして、会談が、1188年11月18日、ボンムーラン (Bonmoulins) で、開催されることになった。

このボンムーランの会談で、3男リシャールは、反ヘンリー2世の証とし

73) George Burton Adams, *The Political History of England*, Vol. 2, *ibid.*, p. 352.

74) George Burton Adams, *The Political History of England*, Vol. 2, *ibid.*, p. 353.

75) George Burton Adams, *The Political History of England*, Vol. 2, *ibid.*, p. 353.

2011年6月 川瀬 進：リチャード1世の国家防衛

て、イングランドの長年敵対関係にあったフランス王フィリップ2世に対して、跪き、オマージュ（the Homage：臣従礼）を執った⁷⁶⁾のである。

言い換えると、3男リチャールは、公然と、父ヘンリー2世に対し、敵対を、宣言したのである。

この会談は、実がなく終わり、3男リチャールは、健康を害し衰えた父ヘンリー2世から離れ、何も得ることなしに、フィリップ2世と共に、去った⁷⁷⁾。

3男リチャールが、父ヘンリー2世を裏切った背景には、当然、父から相続したアキテーヌ公領の実権を得られなかったことの不信感である。

父ヘンリー2世側にしても、3男リチャールに、アキテーヌ、および婚約者、フィリップ2世の姉、アデル＝ドゥ＝フランスとの結婚によるノルマンディー、アンジュー、メーヌ、トゥーレーヌの統治者になってもらっては困る、という理由があった。

父ヘンリー2世は、3男リチャールの騎士、統治者としての能力を良く知っていて、将来、彼に、自身と同じような領土、および権力を持つと、それが自身に対して恐怖となるからであった。

息子の3男リチャールにとってみれば、父ヘンリー2世の考えは、どうでもよいことであり、況して、自身の騎士としての能力発揮のためには、父を切り捨てても良いことであった。

また、3男リチャールは、他から煽られると、敏感に反応し、周りが見えなくなるタイプ（直線型、移り気型、直感型、激情型な性格）であった。

和議のための会談が、何回か行われた。

だが、いずれも、真の和平をもたらす会談ではなかった。

3男リチャールが、ル＝マン（Le Mans）を攻撃、占拠すると、父ヘンリー2世は、退却せざるを得なくなった。

2～3日後、フィリップ2世が、トゥール城（Tours Castle）を襲撃、陥落さ

76) George Burton Adams, *The Political History of England*, Vol. 2, *ibid.*, pp. 354-355.

・ J. R. Moreton-Macdonald, *A History of France*, Vol. 1, *op. cit.*, p. 136.

・ Austin Lane Poole, *The Oxford History of England*, Vol. 3, *op. cit.*, p. 345.

77) J. R. Moreton-Macdonald, *A History of France*, Vol. 1, *ibid.*, p. 136.

せたため、ヘンリー2世は、さらに、シノン城(Chinon Castle)近くまで、退却しなければならなくなった。

そして、ついに、1189年7月4日、コロンビエ(Colombieres)で、最終的な会談が、開催された⁷⁸⁾。

この会談で、馬に乗れないほどの重病のヘンリー2世は、賠償金として、フィリップ2世に、20,000マルク支払わされることになった。

この会談の後、ヘンリー2世は、やつれた体で、やっとのことシノン城に行き、敵方のリストを見て、最大のショックを受けた。

というのは、敵方の1番最初に、言い換えると、自分を見捨てたバロンの1番筆頭に、5男ジャンの名前が載っていた、ことであつた⁷⁹⁾。

謀反を起こした3男リシャール、および裏切つた5男ジャンに対して、ヘンリー2世は、ショックのあまり、顔を壁に打ち付け、泣きながら、かつ庶子ジェフリー(Geoffrey)を除いて、すべての者から見捨てられ、1189年7月6日、56歳、シノン城で、亡くなった⁸⁰⁾。

ヘンリー2世の病死により、32歳の3男リシャールが、1189年9月3日、日曜日、ウェストミンスター=アベイ(Westminster Abbey)で、戴冠式を挙げ、イングランド王リチャード1世になった⁸¹⁾。

イングランド王になつたりチャード1世は、イングラ王として、イングラント国民の生活安定、安心、およびフランス大陸での領民たちの生活安定、安心を、確保しなければならなかつた。

そのためには、イングランドを含むアンジュー帝国の維持、防衛、拡大であつた。

だが、イングランド王リチャード1世は、フランス大陸では、フランス王ル

78)・George Burton Adams, *The Political History of England*, Vol. 2, *op. cit.*, p. 356.

・Austin Lane Poole, *The Oxford History of England*, Vol. 3, *op. cit.*, pp. 345-346.

79) George Burton Adams, *The Political History of England*, Vol. 2, *ibid.*, p. 357.

80)・George Burton Adams, *The Political History of England*, Vol. 2, *ibid.*, p. 357.

・J. R. Moreton-Macdonald, *A History of France*, Vol. 1, *op. cit.*, pp. 136-137.

81) George Burton Adams, *The Political History of England*, Vol. 2, *ibid.*, p. 361.

イ7世の家臣であるが故に、フランス大陸内部での拡大は、望めなかった。

リチャード1世が、イングランド王になる時でも、フランスにて、フランス王ルイ7世に臣従礼を執っている。

このことは、当然、封建制度のなか、公然と、ルイ7世の家臣であることを、宣言したことになる。

イングランドを含むアンジュー帝国の維持、防衛には、多額の経費がかかる。

イングランド王国内の防衛費とえば、北イングランド、すなわちスコットランド王国との小競り合い、また西の海を越えて、アイルランドとの小競り合いである。

これらの小競り合いは、イングランド王国を、危機にいたらすような紛争ではなかった。

だが、これらの小競り合いは、それなりの戦闘員や戦費が必要であった。

当時のイングランドの封建制度において、「国王の家臣は、下臣であり、家臣の下臣は、下臣である」ということである。

すなわち「下臣は、国王の下臣でもある。」ということである。

具体的には、キングの下臣はバロンであり、バロンの下臣は、ナイトである。よって、ナイトは、キングの下臣である。

フランス大陸での封建制度では、「国王の家臣は、下臣であり、家臣の下臣は、下臣である」ということである。

だが、ここでイングランドと違うのは、「下臣は、国王の下臣ではない。下臣は、家臣の下臣である」ということである。

具体的には、ナイトは、キングの下臣ではない、ということである。

このように、イングランドとフランス大陸との封建制度の違いがある。

このことによって、イングランドでは、国王が有事の際は、バロンもナイトも駆けつける。

だが、フランスでは、国王が有事の際は、バロンは駆けつけるが、ナイトは、駆け付けられない。だが、バロンが危機的状態の時は、ナイトは、駆け付けなければ

ばならない。

リチャード1世は、イングランドで生まれ、そしてフランスに行き、さらにイングランドで戴冠式を挙げるまで、イングランドに、わずか2カ月しか滞在していなかった。

そこで、リチャード1世は、フランス語は分かるが、イングランド語については、良く分からないし、またイングランド国民についても、良く知らなかった⁸²⁾。

だが、このことだけで、リチャード1世は、イングランドの愛着がなかったとは言えない。

というのは、もし、愛着がなかったとしたら、イングランド北部でのスコットランドとの小競り合い、アイルランドでの統治の失敗で、心痛することなく、イングランドを、切り離していたであろう。

それよりも、むしろ、リチャード1世は、イングランドの王冠に、執着があったように思われ、最終的に、その王冠を保持するような行動をとっていた。

リチャード1世にとって、目下の課題は、父ヘンリー2世が行かなかった聖地への軍事行動、また、父ヘンリー2世が残っていたフィリップ2世に対する、20,000マルク支払いを、行うことであった。

十字軍参戦への軍事行動費と、フィリップ2世への20,000マルクの支払いとが、王室財政にのしかかって来た。

十字軍遠征のためには、巨額な経費がかかる。

父ヘンリー2世が残した遺産は、100,000マルクにも足らなかった⁸³⁾。

そこで、巨額な経費を捻出するために、リチャード1世は、官職、榮譽、恩赦、王自身が持っている諸権利、および若干の城さえも、販売した⁸⁴⁾。

また、リチャード1世は、「もし買い手がいるならば、ロンドンでさえも、売却する」と⁸⁵⁾。

82) George Burton Adams, *The Political History of England*, Vol. 2, *ibid.*, p. 362.

83) Austin Lane Poole, *The Oxford History of England*, Vol. 3, *op. cit.*, p. 350.

84) George Burton Adams, *The Political History of England*, Vol. 2, *op. cit.*, p. 362.

2011年6月 川瀬 進：リチャード1世の国家防衛

さらに、1189年12月、リチャード1世は、銀貨10,000マルクで、1174年10月のファレス条約を破棄、言い換えるとスコットランド王ウィリアムからの「臣従礼」を破棄、自分との主従関係を破棄させた⁸⁶⁾。

このことは、当然、スコットランド王ウィリアムの自由を、意味している。十字軍遠征のため、リチャード1世は、イングランドを留守にする。

その期間中、イングランドを、どのように統治、防衛しなければならないかが、問題となる。

リチャード1世自身、まず初めに気になったのが、イングランドそのものが、身内に奪われないか、ということであった。

そのことに対して、リチャード1世は、5男ジャンと、ヨーク司教ジェフリー (archbishop of York) とに、自身が帰国するまで、イングランド王国への立ち入り禁止を、宣言させた⁸⁷⁾。

そして、リチャード1世は、実際のイングランドの統治、防衛に対して、教会の力を借りることにした。また、フランス領を含む全領土の統括に対しては、母アリエノール=ダキテーヌの力を、借りることにした。

具体的には、イングランド、およびフランス領での統治、防衛は、以下のとおりである。

リチャード1世は、教会の力、すなわち教会の権限を、強化、浸透させるために、空席になっている司教区の司教を、補充するために、1198年9月15日、ゲディングトン (Geddington) 近くのパイプウェル=アベイ (Pipewell abbey) で、グレイト=カOUNシル (a great council : 大諮問会) を、開催させた。

そのグレイト=カOUNシルで、イングランドの大法官の職を、お金で買い、イーリー (Ely) の司教についた、ウィリアム=オブ=ロンシャン (William of Longchamp) に、イングランドの統治を、託することにした⁸⁸⁾。

85) Josephine Ross, *Kings & Queens of Britain*, Reprinted of 1982, ed., London; Artus Books, 1994, p. 28.

86) Andrew Lang, *A History of Scotland*, Vol. 1, *op. cit.*, p. 116.

87) David Hume, *The History of England*; Vol. 1, *op. cit.*, p. 381.

88) George Burton Adams, *The Political History of England*, Vol. 2, *op. cit.*, p. 363.

また、フランス領を含む全領土の統括を、1189年12月に、カンタベリーのグレイト＝コンフィデンス(great confidence)で、70歳近くになる母アリエノール＝ダキテーヌを摂政(ultimate authority)に就かせ、母に託することにした⁸⁹⁾。

リチャード1世は、1189年12月11日、ソールズベリー司教ヒューバート＝ウォルター(Hubert Walter, Bishop of Salisbury, ?-1205.7.13)を伴い、十字軍遠征へのさらなる準備のため、ヘイスティングズ(Hastings)からノルマンディーに渡った⁹⁰⁾。

そして、1190年3月頃、リチャード1世は、フィリップ2世と十字軍遠征での、細かい協定、同意を得るために、ノルマンディーから、パリから南東、直線で150キロメートル離れたヴェズレー(Vezelay : Vezelai)にやって来た。

ヴェズレーにて、十字軍遠征への出航が、やや遅れた。

その理由は、リチャード1世にとって、イングランドのことが多少気がりになったり、領土問題で、フィリップ2世との協定、同意で手間取ったりしたからである⁹¹⁾。

このフィリップ2世との協定、同意で手間取った理由は、フィリップ2世自身、気難しい性格で、十字軍遠征に対し、あまり情熱を持っていなかった、からである。

というのは、ローマ教皇が、1189年6月、ヘンリー2世とフィリップ2世との紛争に対し、十字軍遠征を理由に、介入してきたからである。なお、23歳近くなったフィリップ2世は、血気盛んな時期であり、十字軍遠征よりも、フランス国内の領土維持、拡大の方が重要で、教皇の特使を無視していた⁹²⁾。

だが、フィリップ2世も大人であり、リチャード1世が、父ヘンリー2世よりも手ごわいことは良く知っている。

そこで、フィリップ2世は、何時、どこで、リチャード1世と戦わなければならないか、を計算に入れていた。

89) George Burton Adams, *The Political History of England*, Vol. 2, *ibid.*, p. 364.

90) Cyril E. Robinson, *England, op. cit.*, p. 83.

91) George Burton Adams, *The Political History of England*, Vol. 2, *op. cit.*, p. 366.

92) George Burton Adams, *The Political History of England*, Vol. 2, *ibid.*, p. 356.

2011年6月 川瀬 進：リチャード1世の国家防衛

この時期、1190年6月10日、第3回十字軍の総司令官として、またその第一陣として、陸路から出兵していた、神聖ローマ帝国ドイツ皇帝フリードリヒ1世＝バルバロッサは、小アジアの戦い中、キリキア（Cilicia）のゲクス川（Goksu）を渡っていた時、落馬により、溺死した^{93）}。

神聖ローマ帝国ドイツ皇帝フリードリヒ1世＝バルバロッサは66歳、当時で言うと高齢であり、かつ戦時中なので、重量のある鎖帷子を着ており、川岸まで、泳ぎ渡ることができなく、溺死したのであろう。

そして、ヴェズレーに来てから3カ月後、表面上、両王の関係が良好になり、1190年6月24日、リチャード1世は、フィリップ2世との同意を得た^{94）}。

すなわち、十字軍遠征中、遠征で得た戦利品のすべてを、等分にする、という新しい同盟条約を結び、1190年6月29日、両王は、ヴェズレーから、同時に、十字軍遠征に出航した^{95）}。

リチャード1世は、遠征地マルセーユ（Marseilles）へ、またフィリップ2世は、遠征地ジェノバ（Genoa）へと、それぞれ、分かれて聖地奪還のための遠征に向かった^{96）}。

そして、両王は、1190年9月に、シチリア（Sicilia：Sicily）で合流して、1190年10月4日、シチリアのメッシーナ（Messina）を、占領した。

メッシーナを占領した秋の時期まで、両王の仲は、良好であった。

その冬の終わり頃、両王の仲は、拗れた。

それは、母アリエノール＝ダキテーヌが、フィリップ2世の異母姉アデル＝ドゥ＝フランスとの結婚を破棄させ、リチャード1世の花嫁候補としてナバラ王サンチヨ6世（Sancho , c. 1133-1194.6.27）の娘ベレンガリア＝オブ＝ナヴァール（Berengaria of Navarre, c. 1165-1230.12.23）を、連れて来たからであ

93) ·Nicholas Hooper & Matthew Bennett, *The Cambridge Illustrated Atlas of Warfare: The Middle Ages 768-1487*, Cambridge University Press, 1996, p. 99.

·Cyril E. Robinson, *England, op. cit.*, p. 83.

94) J. R. Moreton-Macdonald, *A History of France*, Vol. 1, *op. cit.*, p. 137.

95) ·George Burton Adams, *The Political History of England*, Vol. 2, *op. cit.*, p. 366.

·David Hume, *The History of England*; Vol. 1, *op. cit.*, p. 382.

96) David Hume, *The History of England*; Vol. 1, *ibid.*, p. 382.

る⁹⁷⁾。

その時、母アリエノール＝ダキテーヌから、リチャード1世に対し、弟の5男ジャンが、不穏な動き、すなわちイングランドの王冠をねらっている、という知らせがあった。

1191年4月10日、リチャード1世と、フィリップ2世との仲は、悪化し、それぞれ別々に、メッシーナを去り、海路、聖地エルサレムに向かって、出航した。

その時のリチャード1世の艦隊は、約200隻であった⁹⁸⁾。

この聖地エルサレムに向かう途中、リチャード1世は、嵐に遭遇し、危険な目にあつたが、1191年5月6日に、キプロス(Cyprus)のリマソル(Limasol)港に、着いた。

そのキプロスを、リチャード1世とフィリップ2世とが、占領した。

だが、2人の仲は、さらに悪化した。

この2人の仲をさらに険悪ムードにさせたのが、花嫁候補の出現で、リチャード1世が、フィリップ2世の異母姉アデル＝ドゥ＝フランスとの結婚を、実際に破棄し、1191年5月12日、キプロス、リマソル、セント＝ジョージ教会(St. George)で、ベレンガリア＝オブ＝ナヴァールと結婚したからである⁹⁹⁾。

この結婚は、政略結婚で、リチャード1世が、ピレネー山脈近くの国境、すなわちアキテーヌ南部国境を、強化するためであった¹⁰⁰⁾。

政略結婚により、軍事的にアキテーヌが強化されるということは、当然、イングランドにおいても、傭兵を雇うための資金、スキューテイジ(Scutage: 軍役免除金)あるいはシールド＝マネー(Shield-Money: 楯税)が少額で済むので、その分王国内の防衛費に充てることができた。

イングランド王国内のバロンたちにとっても、この政略結婚は、歓迎された

97) George Burton Adams, *The Political History of England*, Vol. 2, *op. cit.*, p. 366.

98) Austin Lane Poole, *The Oxford History of England*, Vol. 3, *op. cit.*, p. 360.

99) George Burton Adams, *The Political History of England*, Vol. 2, *op. cit.*, p. 367.

100) Austin Lane Poole, *The Oxford History of England*, Vol. 3, *op. cit.*, p. 360.

ことであった。

1191年4月、フィリップ2世は、オーストリア公レオポルト5世と合流し、5月20日にイスラム教徒にとって最重要地、聖地エルサレム王国の都市、アッコン（Acco：Acre）の攻撃を、開始した。

1191年5月12日に、ベレンガリア＝オブ＝ナヴァールと結婚したリチャード1世は、6月5日に、アッコン（Acco：Acre）に向かって出航し、6月8日に到着、攻略軍と合流した¹⁰¹⁾。

そして3人の攻略軍は、1191年7月5日に、アッコンを奪還し、1191年7月12日に、占領した。

この占領したアッコンにおいて、リチャード1世は、大失態をした。

それは、占領したアッコンの都市に、オーストリア公レオポルト5世が、自身の軍の幟（banner）を、揚げていたのを、リチャード1世が、その軍の幟を、引き摺り下ろし、防備の濠の中に放り投げ、自身の軍旗（flag）を掲げたからである¹⁰²⁾。

リチャード1世の心ないやり方を見ていたフィリップ2世は、すぐに、自身の役割を果たし得たと考え、表向き病気を理由に、アッコンを旅立ち、1191年末、フランスに帰国した¹⁰³⁾。

フィリップ2世の帰国の本当の理由は、1190年のシチリアでの屈辱的な出来事、すなわち異母姉アデル＝ドゥ＝フランスとの結婚を破棄させられたこと¹⁰⁴⁾と、5男ジャンと結託して、イングランドの王位を奪取することであった。

また、オーストリア公レオポルト5世にとっても、リチャード1世の屈辱的な行動に対し、アッコンから、1191年8月、帰国した¹⁰⁵⁾。

1191年8月20日、リチャード1世は、降伏協定にサラディンが、遵守して

101) George Burton Adams, *The Political History of England*, Vol. 2, *op. cit.*, pp. 367-368.

102) · Austin Lane Poole, *The Oxford History of England*, Vol. 3, *op. cit.*, p. 362. n. 1.
· Cyril E. Robinson, *England, op. cit.*, p. 85.

103) George Burton Adams, *The Political History of England*, Vol. 2, *op. cit.*, p. 372.

104) Cyril E. Robinson, *England, op. cit.*, p. 85.

105) Cyril E. Robinson, *England, ibid.*, p. 85.

いないとして、数えられないほどのイスラム教徒を、処刑した¹⁰⁶⁾。

軍事力が低下したリチャード1世は、単独で、エルサレム奪還に向かった。

エルサレムを陥落させるためには、まず初めに、地中海沿岸の重要港町ヤッファ (Jaffa) を占領しなければならない。

そこで、1191年9月7日、リチャード1世は、ヤッファの北アルスフ (Arsuf) のイスラム軍を攻撃した。

このアルスフの戦い (the Battle of Arsuf) において、リチャード1世は、イスラム軍の弓騎兵により、大きな打撃を受けたが、1191年9月10日、ヤッファを占領した。

その後、リチャード1世軍と、サラディン軍とは、一進一退を、繰り返すようになり、勝敗が付かなかった。

だが、その頃、リチャード1世に対し、側近から、5男ジャンが、フィリップ2世に支援を受け、イングランドの王冠を奪うために、イングランドを統治していると、悪い情報もたされた¹⁰⁷⁾。

このことにより、1192年8月、サラディンと3年間の休戦協定を結ばざるを得なくなった¹⁰⁸⁾。

この第3回十字軍の遠征において、リチャード1世は、シチリアでのフィリップ2世との争い、キプロスの占領、アルスフの勝利によるヤッファの占領、戦っても、戦っても効果無きエルサレムへの進軍、サラディンと締結した3年間の休戦協定において、これらすべての経費を、サラディン=タイス、スキューティジ、シールド=マネー、およびユダヤ人から収奪したお金で賄った。

VI カルケージ (Carucage : 一定耕地保有税)

イングランドにおいて、1191年10月5日、5男ジャンの呼びかけで、第1

106) Allen Andrews, *Kings and Queens of England & Scotland, op. cit.*, pp. 44-45.

107) Allen Andrews, *Kings and Queens of England & Scotland, ibid.*, p. 44.

108) Christopher Tyerman, *England and the Crusades 1095-1588*, The University of Chicago Press, 1988, p. 58.

回目のグレート＝カOUNCIL (a great council：大諮問会)が、リーディング (Reading) と、ウィンザー (Windsor) の中間地で、開催された。

1191年初めに、イングランドにやって来た5男ジャンが、初めは、大人しかったのだが、しだいに、国政に介入するようになってきた。

このことに対し、イングランドの国政を託されていた、イーリー司教でイングランドの大法官ウィリアム＝オブ＝ロンシャンと、衝突してしまった。

この衝突を回避するための第1回目のグレート＝カOUNCILであったのだが、結果的に、ウィリアム＝オブ＝ロンシャンは、解任され、大陸へ逃れざるを得なくなった¹⁰⁹⁾。

休戦の結果、リチャード1世は、1192年10月9日、アッコンから、航海にて、イングランドへの帰国の途に就くことになった。

その帰国の途中に、リチャード1世は、嵐に遭遇し、乗船した船が難破し、アドリア海北端のイストリア海岸 (the coast of Istria) に漂着した¹¹⁰⁾。

このため、リチャード1世は、陸路にて、帰国することになった。

だが、1192年12月20日、オーストリアを横断中、ウィーン近くで、オーストリア公レオポルト5世に、捕らえられ、捕虜として、ドナウ川の要塞地、デュルンシュタイン (Dünstein) のクエリンガー城 (Kuenringerburg：デュルンシュタイン城 Burg Dünstein) に、1192年12月21日に、幽閉された¹¹¹⁾。

109) George Burton Adams, *The Political History of England*, Vol. 2, *op. cit.*, p. 372.

110) Austin Lane Poole, *The Oxford History of England*, Vol. 3, *op. cit.*, p. 362.

111) David Hume, *The History of England*; Vol. 1, *op. cit.*, p. 394.

・Josephine Ross, *Kings & Queens of Britain*, *op. cit.*, p. 30.

・リチャード1世が、捕虜として、1192年12月21日に、ドナウ川の要塞地、デュルンシュタインのクエリンガー城(デュルンシュタイン城)に幽閉された時、リチャード1世の居場所を探すために、吟遊詩人ブロンデル (Blondel) が、奏でる歌に、リチャード1世が答えて、居場所が分かったという話がある (Josephine Ross, *Kings & Queens of Britain*, *op. cit.*, p. 30.)。著者 (=川瀬) が、8回、冬、夏に、クエリンガー城 (デュルンシュタイン城) の廃墟に行ってみると、風のさわやかな音と、眼下のデュルンシュタイン村を、走る車の音しかしなかった。当時、城の中で幽閉されていたならば、村からの歌は、聞こえないはずである。もし吟遊詩人ブロンデルが、リチャード1世の居場所を見つけたというならば、恐らくリチャード1世が、村に降りていた時か、城の外に居た時であろう。村の入り口の城門に入って、すぐに、山手の方に、城を案内する矢印が出ている (2009.8.10現在)。この矢印から城まで、歩いて約15分かかる。

その後、リチャード1世の身柄は、神聖ローマ帝国ドイツ皇帝フリードリヒ1世＝バルバロッサから後を引き継いだ神聖ローマ帝国ドイツ皇帝ハインリヒ6世（Heinrich , 1165.11-1197.9.28：在位1190-1197）に引き渡され、捕虜として、トリフェルス城（Burg Trifels）に幽閉された。

リチャード1世の身柄解放、いわゆるイングランド王の身代金に、神聖ローマ帝国ドイツ皇帝ハインリヒ6世は、150,000マルク要求した¹¹²⁾。

この身代金を工面するために、ソールズベリー司教ヒューバート＝ウォルターは、リチャード1世から離れ、一足早く、イングランドに戻った。

そこで、ソールズベリー司教ヒューバート＝ウォルターは、リチャード1世の母アリエノール＝ダキテーヌと共に、イングランド中から、お金を掻き集め、身代金150,000マルクのうち、100,000マルクを、釈放の一時金として、支払った。

この情報を得たフィリップ2世は、イングランドにて、王位奪取に精力を注いでいた5男ジャンに対し、「“ 気を付けて：悪魔が解放された。”¹¹³⁾」と、忠告した。

この身代金の要求に対して、母アリエノール＝ダキテーヌが、80,000マルク提供し、1194年のミカエル祭（the Michaelmas：大天使ミカエルの祝日、9月29日）までに、残りの150,000マルクに達するまで、イングランド国民が、月々1,000ポンド支払う、ということになった¹¹⁴⁾。

釈放のための一時金と、残りの身代金とを、掻き集めたのは、当然、リチャード1世の母アリエノール＝ダキテーヌと、ソールズベリー司教ヒューバート＝ウォルターとである。

その結果、神聖ローマ帝国ドイツ皇帝ハインリヒ6世は、1194年2月4日、リチャード1世を、釈放した。

リチャード1世が、ドイツのクエリンガー城（デュルンシュタイン城）と、

112) George Burton Adams, *The Political History of England*, Vol. 2, *op. cit.*, p. 375.

113) George Burton Adams, *The Political History of England*, Vol. 2, *ibid.*, p. 375.

114) George Burton Adams, *The Political History of England*, Vol. 2, *ibid.*, p. 375.

2011年6月 川瀬 進：リチャード1世の国家防衛

トリフェルス城とに拘留された期間は、約1年と2カ月足らず(1192.12.21-1194.2.2)であった。

この拘留期間の間、リチャード1世は、巨額な身代金が、どのようにしてイングランド国民から徴収されるのかが、心配であった。

この心配が、リチャード1世を、イングランドへの愛着、あるいは国防へと、駆り立てていったであろう。

もし、リチャード1世にイングランドへの愛国心がなかったら、1192年8月、サラディンと3年間の休戦協定後、すぐに、ノルマンディーに向かったであろう。

そこで、リチャード1世は、自身の身代金工面に奔走してくれた功績に対し、手紙にてソールズベリー司教ヒューバート=ウォルターを、カンタベリー大司教に推挙する旨を、ローマ教皇ケレスティヌス3世(Coelestinus , 1191-1198)に出した¹¹⁵⁾。

釈放されたリチャード1世は、早急に、あるいはようやく1194年3月16日、イングランド、ロンドンに帰り着いた。

ロンドンに着いたリチャード1世は、即、5男ジャンを屈服させ、実質的なイングランド王の権力を掌握した。

そして、次に、リチャード1世は、フランス領のノルマンディーに、フィリップ2世が侵入していたので、彼と戦うために、ノルマンディーに向かった。

その前に、イングランドを再び留守にするので、カンタベリー大司教ヒューバート=ウォルターを、大法官に命じた¹¹⁶⁾。

ノルマンディーにて、国境沿いの領土問題について、1つの和平条約が結ばれることになった。

それは、1196年1月15日の和平条約である。

この和平条約によって、重要な要塞地ジゾール(Gisore)とノルマン領ヴァクサン地方(the Norman Vaxin)とが、フランス王国領になってしまった¹¹⁷⁾。

115) George Burton Adams, *The Political History of England*, Vol. 2, *ibid.*, p. 376.

116) George Burton Adams, *The Political History of England*, Vol. 2, *ibid.*, p. 379.

このことに対処するために、リチャード1世は、ノルマンディー公国の防備をより強化しなければならなくなった。

そこで、リチャード1世は、巨額な資金を投じて、1197年から1198年にかけて、要塞シャトー＝ガイヤール(Château-Gaillard: ガイヤール城)完成させた¹¹⁸⁾。

このシャトー＝ガイヤールは、リチャード1世が、ノルマンディー公国の都ルーアンを防衛するために、セヌ河を見下ろすレ＝ザンドリー(Les Andelys)高台の上に築いた巨大な要塞のお城である。

このシャトー＝ガイヤールの築城により、リチャード1世は、十分に、フィリップ2世を攻撃する準備ができた。

だが、イングランドの王室財政が、身代金、築城により、かなり逼迫していたので、戦費まで、捻出できなかった。

そこで、少しでも王室財政を豊かにするために、言い換えると巨額な戦費を、捻出するために、リチャード1世は、大法官、カンタベリー大司教ヒューバート＝ウォルターに命じて、新しい課税、カルケージ(Carucage : 一定耕地保有税)を、1198年に、創設させた¹¹⁹⁾。

このカルケージは、イングランドにおいて、納税者の保有地の大きさに基づいて課された土地課税である。

また、このカルケージは、ウィリアム1世征服王(William I, the Conqueror, c. 1027-1087.9.9 : 在位 1066-1087) 世治世時、デイン人(the Danes) に対抗するための地租、デインゲルト(Danegeld : 土地課税) に代わる土地課税である¹²⁰⁾。

財政難に困っていた丁度この1199年の春の時期に、朗報が入って来た。

それは、リムーザン(Limousin) の家臣の1人、シャリュス領主(the lord of Chalus) の畑から、驚くほどの財宝が見つかった、といことであった。

117) George Burton Adams, *The Political History of England*, Vol. 2, *ibid.*, p. 379.

118) Charles Omam, *A History of The Art of War in the Middle Ages*, Vol. 2: 1278-1485AD, Greenhill Books, 1991, p. 33.

119) George Burton Adams, *The Political History of England*, Vol. 2, *op. cit.*, p. 385.

120) J. H. Round, "The Great Carucage" *The English Historical Review*, Vol. 4, (1889), p.105.

当然、リチャード1世は、自身が保有する領地から見つかったので、この財宝は、自身のものだと、主張した。

だが、これを聞き入れなかったため、リチャード1世は、武力で持って、この財宝を手に入れるために、シャトー＝シャリュス(Château-Châlus: シャリュス城)を包囲攻撃した¹²¹⁾。

この包囲攻撃中に、リチャード1世は、1199年3月26日に、クロスボウ(crossbow)の矢を、首近くの左肩に受け、1199年4月6日、42歳で亡くなった¹²²⁾。

Ⅶ おわり

リチャード1世は、幼少期、父ヘンリー2世の浮気により、1168年に、母アリエノール＝ダキテーヌの故郷、アンジューの首都、ポワティエ連れて行かれ、育った。

そのため、リチャード1世にとって、アキテーヌは、人一倍、思い入れがある。

この時点では、生誕地のイングランドについて、何も感じていなかったであろう。

その後、騎士として、処世術を、宮廷で学び、やがて、実際に、小競り合いや、紛争、戦争を体験していくと、常にリーダーでなければならないという気運が、リチャード1世に、芽生えて来た。

兄2男ヤング＝ヘンリーが、1183年6月11日、赤痢で亡くなって以来、イングランド王に就いたリチャード1世は、イングランドが、自身の生活の1部となり、イングランドの財政、防衛を考えなければならなくなった。

リチャード1世治世当時、スコットランドからの小競り合い、侵入は、あったものの、海外からの攻撃は、さほどなく、戦争に至った衝突はなかった。

言い換えると、リチャード1世治世当時は、父ヘンリー2世当時と同様に、

121) George Burton Adams, *The Political History of England*, Vol. 2, *ibid.*, p. 386.

122) George Burton Adams, *The Political History of England*, Vol. 2, *ibid.*, p. 386.

行政、司法、軍事がしっかりと確立していて、経済が安定していたので、王国内を平穩にしておけば、当然、王国の防衛も、強化されていたのである。

また、リチャード1世が、イングランド王国の防衛を、他のイングランド領地よりも、重要視していた。

このことは、リチャード1世が、1192年8月、サラディンと3年間の休戦協定後、帰途に向かったのは、イングランドである。

でも、この時は、弟の5男ジャンが、イングランド王位篡奪しようとしている情報を、得てのことであった。

だが、1194年2月4日、神聖ローマ帝国ドイツ皇帝ハインリヒ6世から釈放され、帰途に向かったのは、やはりイングランドであった。

この時は、イングランドにて、弟5男ジャンが、着々と、イングランド王として権力を振るっていたり、また、ノルマンディーにおいては、フィリップ2世が侵入したり、アキテーヌのパロンが、反乱を起こしたことを、側近から聞いて、理解していた。

このような状況から考えると、もし、リチャード1世が、イングランドに対する愛国心がなく、アキテーヌに対する思い入れが強かったならば、すぐに帰途を、ノルマンディーにしていたであろう。

だが、実際は、イングランドに戻った。

これらのことから判断すると、リチャード1世は、王位を継承して以来、アンジュー帝国を維持するためには、イングランド王国の経済と防衛とを、第1に考え、イングランド語がうまくしゃべれなく、フランス語がうまくしゃべれたとしても、アキテーヌ以上の思い入れがあったのである。